

明治維新150年

「国体の歴史」としての日本近代史

講師

白井聡

思想史家・政治学者

2018 11.19 MON

オリエントホテル高知

主催 公益社団法人 高知県自治研究センター
〒780-0862 高知市鷹匠町2丁目5-47 TEL088-822-6460

撮影：梅谷秀司

(公社) 高知県自治研究センターセミナー

2018年11月19日(月)

(司会)

今年は明治維新150年ということで、方々でイベントなどもやっているわけですが、その一方で何か明治時代を礼賛するようなそんな言説もあったりして「何だかなあ」というふうに思っているところです。それで戦間期である昭和16年から昭和20年までの4年間を除くと、ちょうど明治維新から戦前まで、そして昭和20年から現在までが同じ73年なんですね。今日の白井先生のお話にも多分あるかと思いますが、戦前と戦後の「国体」ということをキーワードにしながら現在の日本の状況というか、惨状と言った方が良いのかもしれませんが、そういったものを読み解いていただきたいなということで今回企画をしたところです。

早速ですが、先生のご略歴はお手元の資料の表紙の裏に書いてございますから、そちらの方をご覧いただきたいと思います。そうしましたら「明治維新150年『国体の歴史』としての日本近代史」ということで、早速ですが白井先生よろしくお願いたします。

明治維新 150 年

「国体の歴史」としての日本近代史

思想史家・政治学者 白井 聡 氏

(京都精華大学人文学部専任講師)



明治維新150年 「国体の歴史」としての 日本近代史

京都精華大学 白井 聡

我々よく知っているわけですから、何ともかわいそうだなあと、あるいはこれが悲劇というもんだなあと、そんな考えを持つわけです。しかしながら、明治維新 150 周年ということは盛り上がりはいるんですけども、残念ながらこのブームというのは私達の歴史に対する物の見方と言いますか、歴史意識といいましょうか、そういうものを更新するような新たな物にするような感覚というのをちっとももたらしていないように感じます。

皆さん、こんばんは。

本日はお招きをいただきまして本当にありがとうございます。実は高知県には私は生まれて初めてやって来まして、初めてその土を踏むことができた、そのような機会をいただいたということで大変うれしく思っています。早速、着いてすぐに少し町の風景を見ているとですね、何ですか薩長土肥、平成の新同盟とか、そのような宣伝文句が市電のホームに掛かっている。何とんでも土佐は明治維新の立役者の一つでありますから、やはり盛り上がりというものは見せていいわけでしょう。昨日も、たまたまホテルでテレビを見ていたら、「西郷どん」をやっています、いよいよ西郷と大久保の対立というのがのっぴきならないことになっちゃって、西郷さんが東京の政府を辞めて薩摩に帰るということを決断したというところにちょうど差し掛かっておりましたけれども。その後どうなるかということ

講師略歴

- ・ 1977年東京都生まれ
- ・ 早稲田大学政治経済学部政治学科卒業
- ・ 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位修得退学、博士（社会学）
- ・ 専攻：政治学・社会思想
- ・ 日本学術振興会特別研究員等を経て現職
- ・ 『永続敗戦論——戦後日本の核心』により、石橋湛山賞・角川財団学芸賞を受賞
- ・ 他の著書に『未完のレーニン』、『戦後政治を終わらせる』など

日本人は反「革命」主義？

僕は非常に不思議だなあと素朴に思うことが一つありまして、それは、日本人ほど革命の嫌いな国民はいないんじゃないかと思うんですね。最近の日本人というのを見ているとですね、革命なんていうのは大嫌いだと。そのくせ、明治維新のことは好きな

んですよね。明治維新というのはやはり実質的に見て私は革命だと思ってますが、とにかく明治維新のことは好きだと。じゃあ、何で好きなんだろうかと、それは元気が出るからというのも理由の一つで、ああやって大きなことを、大事をなして国の面目を一新しようということで大いに頑張って成し遂げた、実際に国の有様というと一新させた、凄くないかと。しかし、じゃあそんなに革命好きなのかということ、一方で、ここ10年ほどの政治状況というのを見てみますと約10年前に民主党による政権交代がありました。議会政治を通じた政権交代というのは、政治理論的に言えば一種の疑似革命と言いましょか、要は革命の代わりなんですよ。というのは、革命というのは恐らく暴力革命というのがその原型でありまして、要するに政権＝権力が交代するたびに暴力沙汰をやるわけにまいませんから、そのたびに暴力革命をやっていたらこれはたまらんと。社会は無茶苦茶になってしまうわけですから、ある意味革命の暴力っていうものを選挙と議会という制度の中に閉じ込めるということが議会政治の本質であります。従いまして、政権交代というのはある意味革命の代わりに他ならないわけなのでありますけれども、これが結局のところ上手くいかなかったと。なぜ上手くいかなかったのかということについては後でもう少しちゃんと話します。

それでこれじゃあ上手くいかないの、じゃあ自民党に戻そうよということになって安倍政権になって、そしてこれが今や長期政権、6年になんなんとしていう、本当に私から見ると恐るべき時代であります。6年も続いているわけですけども、じゃあ、そんなに強く支持されてるんですかと、まあ一部もの凄い岩盤みたいな支持層がいるっていうのも明らかなんですけども。だけれども世の中の大半の人はそんなに積極的に支持しているわけではないわけですよ。他がないからとか、結局自民党でないと安定しないからとかです。ともかくこれは、現状維持と言いましょか、とにかく大幅に変わるようなことだけは絶対に避けてほしいと。つまり、これはもう徹底的な、誠に徹底的な反革命だというべきです。その革命的变化みたいなものを絶対に嫌うが故に安倍さんを支持すると。そういう具

合に日本人のメンタリティーはなっている。一方でそのくせ明治維新というのは良いじゃないかと。こういう中でですね、やっぱり本当の意味で歴史を振り返って私達の歴史意識を更新するには、やはり150周年というのはいいい機会だと思うんですけども、確たるパースペクティブ（釣り合いの取れた見方）というものが需要ではないかと思えます。私が提示しているのは、「国体」の歴史としてこの150年というのはい総括できるはずだというのが私の説であります。

変わっても変わらない「国体」

「国体」という言葉は死語ですね。今日の日本人だと、「国体」というと大体の人間は国民体育大会の方を思いうかべるわけであって、あの戦前の「国体」という言葉、これはある意味絶対的なものだったわけですね。なにせこの「国体」の変革を企てるという者に対しては治安維持法でもって最高刑＝死刑に罰せられるというものであったわけですから、まさしく「国体」の国だったわけです。それが1945年の敗戦を契機にしてこの「国体」なるものは、解体されたということになってるわけです。解体されたということになっているからこそ、この言葉は死語になっているということでもあるんですが。

ところが、これは現代史の謎というべきではないかと私は思うんですけど、あの戦争末期に何が起きたかということ、これは大体誰でも合意できるんじゃないかなと思うんですが、非常に戦争が長引いたということですね。犠牲者の数という側面から見ますと日本人だけで300万以上の犠牲者が出てるわけ



ですけれども、そのうちの200万、つまり3分の2が最後の1年間で亡くなってるわけです。そこには東京大空襲でありますとか、その他の空襲、都市空襲、それから原爆、沖縄戦、これらは全て最後の1年間に起きたことでありまして、大変な損失がそこに集中しているわけです。だからもっと早く1年前に、もし1944年8月に戦争が終わってれば犠牲は半分ぐらい防げたということにもなるわけです。

じゃあ、なぜそれができなかったのか。もちろん当時の戦争指導層だってもうこれは駄目だ、負け戦だと、まあ最初から分かってたんですけれども。しかし、それが本当にはっきりしてきて、もう完全に勝ち目がなくなって、そうするともうどっかで幕引きするしかないわけです。幕引きするしかないわけなんだけれども、これが中々できなかった。そのたびに大変な犠牲者を出し続けたということになるわけですけれども。じゃあ、なぜ幕引きができなかったのかというと、国体護持だったわけですね、問題は、負けることは確定した、でも何としてでも「国体」を護持したい、これが当時の戦争指導層にとっての最優先課題になり、そのために戦争がずると長引いていくわけです。そして有名なエピソードでありますけれども、本当にこの最終局面になってもポツダム宣言の受託ということを連合側に通達をする。そこでもって唯一の条件を付けるわけですね。「国体」を護持するということができるように。それを唯一の条件として受託するという条件を付けて連合側の側からの返答が、まあ希望的観測ですよ、日本側からすると。まあ、これは大丈夫じゃないかと、「国体」はどうやら護持できるんじゃないかという感触を得たので8月14日に、連合国に対してポツダム宣言を受け入れますということを通達するわけではありますが。

さらに言えば、それまで「本土決戦だ、1億火の玉だ」と言っていたわけですよ。なぜそれをそこで突然撤回することになったのかというと、本土決戦をやると国体護持ができなくなるからなんですよ。それが最大の動機だった。これはいろんな歴史研究者が見解を出しています。だから、あの戦争末期においては、まあ末期というか最初からあの戦

争において終始一貫して国民の生命や財産を守るということはどうでもいいことだったわけですが、あれだけ戦争が長引いてしまったのも国体護持のためであつたし、あのタイミングでやめたというのも、これ以上国民を苦しめるのはもうやめようということではなくて、国体護持のためだった。ただひたすらに国体護持だった、こういう国だったわけです。先ほど申しましたように、どうやら国体護持は叶いそうだったということになったんで、8月15日に玉音放送がぐだされ、その中の文には「朕（ちん）茲（ここ）に国体を護持し得て」という文言が出てくるわけですね。そして戦争直後に何が起きたかという、新憲法が出てくるわけですけど、ここでもこの新憲法をめぐる国会審議の中で、この「国体」が問題になるわけです。

どういうことかという、と、「国体」という言葉には国家体制の根本という意味が含まれていて、新憲法は明らかに国家体制が根本的に変わるという意味の内容を持っている。したがってこれは国体護持がされているとは言えないのではないか、「国体」は完全に変更されているのではないかという質問が野党議員から当時の吉田茂首相に対してなされています。それに対して吉田茂がどう答えたか。「いやいや五箇条の御誓文を読んでみたまえ。あそこには万機公論に決すべし」と書いてあって、これが民主主義だと。したがってこれは新憲法で民主主義を高らかに歌い上げていて、これは日本の「国体」に絡むものだから「国体」は毫も変更されないと、こういうふうに吉田茂は言っています。それから金森徳次郎という当時の憲法担当国務大臣がいたわけですが、この人も何と言ってるかという、と、「水は流れても川は流れない」という、分かるようなよく分からないような言い方で、「国体」は変わっていないということを宣言しています。つまり、玉音放送そして戦後の憲法に関する国会審議の中でも、「国体」は全く変わっていないと確認されているわけです。

だとすればなぜこの「国体」という言葉は死語になっているのか、極めて謎であるというべきかと思えます。そしてまた、付け加えさせてもらわなくちゃならないのは、サンフランシスコ講和条約が

1951年に調印されて一応占領期が終結するわけですが、これに署名してるのが吉田茂ですね。じゃあ、あの条約に署名をするというのは、国際的にどのような意味があったのかということ、ちょっと考えてみたいと思うんですね。これは明らかに国家体制、つまり「国体」が根本的に変更されたということを国際社会に対して宣言する、あるいは約束するものに他ならないはず。と言いますのは、なぜ国際社会の中で、占領期間が終わって独立を回復できるのかと言えば、それはあの戦争の時の日本とは違った国になりましたということ、当然そこで約束してるはずなんです。もしそうでなければ、例えば戦後のドイツが、「まあ、うちらは別にナチス第三帝国であろうが何も変わってない、うちの第三帝国の国体は変わってない」と言って、そのままの「国体」で国際社会に復帰するなんてことがありえたでしょうか。もちろん絶対にありえないわけです。そして当然日本とて同じことです。いわゆる天皇を崇拝する国家であったと。完全に狂った軍国主義国家である、そういうふうに見られていたわけですから、従って占領改革というのを通じて、あの時の日本とは違った国になりましたからもう一度国際社会の仲間に入れてくださいと、こういう具合に「国体」が変更されたということ、世界に対して約

束をしているはずなんですよ。ですから、この間に起きていることは極めて奇妙であると言わざるを得ないということです。

国会で「国体」は何にも変わっていないと言ったのと全く同じ人物が国際的対外的には、「国体」は全くがらりと変わったということを宣言している。どういうことなんだろうかと思うわけです。果たして「国体」は護持されたのか、それとも護持されなかったのかという、ずうっとこの問題・疑問というのは謎というのは残り続けてきたはずなんです、しかしいつの間にやらそのことはきちんとした答えが出されないままに蒸発するかのとき有様で今日に至ってしまったのではないのかと思います。

そこで私が出した仮説は、簡単に申しますと「国体」はもちろんそのまま生き延びたということはありません。だけれども国体的なるものと言いましょか、あるいはこれはいわゆる天皇制という、「国体＝天皇制」というふうには今は一般に見られるわけですが、かつて日本の論壇や学術界で盛んに論じられたところの日本社会の特質としての天皇制的なるものが残存してきたのではないか、今日も残存しているのではないか。つまり、これは要するに「国体」は生きていますか、死んでいるのか。一方では、同じものがそのまま続いている



わけじゃないですから死んでるんですね。けれども、もう一方では何らかの意味で生きている。これは一体何なんだろうかと思うわけです。

フルモデルチェンジした「国体」

そこで私が考えた仮説というのはある種の再編、ものの例えで言えばフルモデルチェンジみたいなものです。フルモデルチェンジをして生き延びたんじゃないのかということでもあります。その際のフルモデルチェンジにおいてポイントになるのは何かというとアメリカなんです。いわゆる戦後の天皇制というのは、やはり戦争責任を問われて、天皇制そのものが廃絶されるという可能性もあったわけですが、結局のところマッカーサーをはじめとするアメリカの判断というのは、これを断固として残すべきであるというものだったから象徴天皇制へと作り変えられて、残ったと。その際にアメリカの考え、アメリカの行動、アメリカの意志、これが大きく介在したということは、これは常識としてよく知られていることでもありますけれども、そのことの巨大な意味というのは、現在まであまり気づかれてこなかったんじゃないか思います。巨大な意味とは端的に言ってしまいますと、アメリカが天皇を助けたはずだったんですけども、いつの間にかアメリカが天皇になり代わったというようなことになってきたというのが戦後の日本なのではないかということです。

すなわち、「国体」の再編といった時に、その戦前の「国体」の頂点を占めるのは天皇陛下であると、これは当たり前ですね。ところが戦後の「国体」というのは言ってみればアメリカが天皇の位置を占めるという、そういう形の「国体」へと変化してきて今日に至るのではないかと考えています。そのことを最も端的に分かりやすく示す実例の一つだけ挙げるならば、沖縄で特に顕著なわけなんです。沖縄では当然反基地運動がありますね。それに対して右翼・右派あるいは保守と名乗る人達は反「反基地運動」みたいなのをやるわけです。で、その人達もいろんな意味で緊迫する中で活動しているわけですが、デモンストレーションなんかをや

る。その時に彼らは星条旗を持って振り回しているわけですよ、日の丸と一緒に。私はちょっと呆然としたわけです。おかしいなと。この人達は愛国者であるというふうに思ってるんだよなと。で、愛国者を自称する人が他国の国旗、しかもかつてたくさん日本人を殺し、そして核兵器を使い、そして今日でもずうっと巨大な基地を置き続けている国、そのような国の旗を喜んで振り回している、何なんだろうと。恐らくこの人達にとっては星条旗というのは日の丸以上に国旗なんだろうなと、同じかそれ以上に国旗なんだろうなというふうに理解する他ないと私は思います。さらに言えばこういう人達はしかし、やや希少な人達というふうに思われるかも知れませんが、でも実は希少どころじゃなくて、ある意味メインストリームなんです。

なぜかという、この国においては政治も経済もメディアもあるいは学問の世界も主流派とは誰ですかと言ったら親米保守ですよ。親米保守こそ戦後の保守本流であります。親米保守って大体気持ち悪いんですね、はっきり言ってしまえば。ナショナリストのくせに何で親米という頭文字が付くんだと。実に気持ち悪い人達です。しかしこれこそが、メインストリームでありまして、そしてその親米の心を、突き詰めていくとアメリカの悪口を言ったりですね、アメリカ軍・米軍基地は「けしからん」と言ったりするような左翼は「けしからん」と言って星条旗を振りまわすと、こういう行動になるわけで、従っていわゆる世の中のメインストリームの親米保守と、沖縄辺りで反「反基地運動」をやって星条旗を振り回している人達ってというのは、地続きに繋がっているっていうことですよ。

こういう具合に、いつのまにか戦後日本においてナショナリズムそのものがアメリカなるものによって浸透されているということになってしまっている。で、そう考えて見れば戦後も実は「国体」が生き延びていて、そしてその戦後の「国体」というのは、要は日本の天皇の上にアメリカが君臨するような形態の物なんではないかと。こういうふうに見ていくと、この150年というものが非常に私はクリアに見えてくる。どういう構造をなしているのかということが見えて来るのです。その詳しいことにつ

いてはまた後にお話します。

私はもともと東京出身なんですけれども、今は京都の大学で教えております。もともと私は、社会思想とか政治思想とかいったあたりが専門でありまして、この日本現代史だとか時局的・政局的なこと、まあこういった事柄について何か大仰にいろいろ書いたり、本まで出すなんてことは自分の仕事じゃないと思ってたんですね。だけど、ちょっとそうは言ってもらえないと思わされるきっかけがあって、この『永続敗戦論』の本を2013年に出すことになりました。



「無責任の体系」の既視感

そのきっかけ、直接的なきっかけは、3.11でした。当時は神奈川県に住んでおりましたが、非常に不安な日々を過ごしたわけです。ただ、そのだいぶ前からこの国は随分おかしいことになっているんじゃないか、まずいんじゃないかということをいろいろ感じてたんですけども、あの原発事故でもって、これはちょっと想像をしていたよりもはるかにやばいレベルで駄目になっていると。言ってみれば日本のとりわけエリート層というのは、スカスカになっているんだなということを感じました。なんでここまで酷くなっているのかという原因を探っていくと、非常に古い話をするのですが、あの戦争という問題に行き着かざるを得ない。もっと正確に言うと、結局のところあの戦争の未処理ということ、ちゃんとした総括をしていないということに行き着かざるを得ない。そのことを誰かしかるべき専門家が、現代史の先生とかが、きちっと指摘し

てほしいなと思ってたんですけど誰もやらないんですね。なので、これは仕方がない、誰もやらないんだったら自分でやるしかないということでこの本を出すに至ったわけです。この永続敗戦という言葉・概念を思いつくことによってこの本を書いたわけですが、非常に奇妙な言葉です。じゃあ、どういう意味なのかということと、書いたきっかけから説明したいと思います。

先ほど言ったように3.11が『永続敗戦論』を書く引き金になりました。だけれども、それ以前にもう一つ重要なきっかけがありました。それは何かというと、民主党政権の失敗、結局政権交代が駄目に終わったということです。最後の野田政権なんかになるともう、自民党野田派とまで言われていたわけですから、それだったら最初から自民党にやらせておいた方がいいということになって現在に至るわけですね。だからこの経緯によって明らかになったことは何かというと、早い話が政権交代は不可能だということですね。あるいは政権交代とはもちろん建前的には制度的にはいつでも可能なんです。形式的には可能だけれども、それは実質的には政権交代でない限りに置いて可能であるような政権交代にすぎないと。こういう忌々しい現実が明らかになったわけです。

民主党政権の成り行きの中でも、とりわけ劇的な形で本当の政治構造を露呈させたのは、やっぱり鳩山政権が挫折するという事件だったのではないかと思います。御承知の通り、普天間基地の辺野古移設問題を巡って鳩山さんはお辞めになったわけですが、あの時に最低でも県外だということを実質的に公約にして選挙に臨んで、そして勝ったわけです。



勝ちましたんで、政権を取ってこれを実行に移そうとするわけです。ところが、アメリカの側から見てみるとどう見えるかっていうと、その辺野古に造るというのはアメリカと約束していることであるわけですから、したがってこれは、ちゃぶ台返しだということにもなりかねないわけです。

だからここで一種の衝突ということが起きた。どうということかという最低でも県外というのは選挙を通じて示された日本国民の主権者としての意志であります。他方で辺野古に造るという話はアメリカとの約束です。この二つが矛盾をして衝突するような事態というものが生まれたわけです。日本の主張としては大変難しいということになっている。どっちかを捨ててどっちかを取らなければならないということで結局、鳩山さんはどっちを取らざるを得なかったかという、アメリカとの約束を優先せざるを得なくなったということなわけです。だから、これは日本国民にとっては非常に厳しい現実が明らかになったんです。いくら選挙を通じて私達が公的に示した国民の意志というものであっても、ある分野を巡っては全然貫徹できないんだという現実が現れたわけです。これは要するに日本人の意志という観点からみれば、負けたということですね。衝突をして負けたということですよ。

だけれども思い出してほしいのですが、当時鳩山さんが辞めるというのは、これこそ負けたということだよと。単に鳩山さんが個人的に敗北したということじゃなくて、日本国民が敗北したということだよという形で状況を把握し整理したような報道というのがあったのでしょうか。私は一つもなかったと思います。その代わりメディア報道はどういうことを言っていたかという、鳩山さん個人の問題だという話ですね。要するに個人の力量の問題、政治家としての技術が下手くそであるとかですね、それから思考回路がちょっとおかしいんじゃないかとかですね、鳩山個人に対する批判でした。これらの批判に仮に当たっている部分があったとしても、しかしながらその時に露呈した問題はそんなケチな小さな問題じゃないわけです。鳩山由紀夫という一人の政治家の手腕がちょっと高いとか低いとか、そんなささいな問題ではなくてもっと構造的な問題が露呈

したはずなのに、メディアは一切そんなこと言わないわけです。

この時に何が起きてるのか、まるで霧の中にいるような気持ちがありましたけれども、暫くたって考えてみた時に、要するにこれは負けたってということじゃないかと。そしてそれはごまかされたんだと。このことは8月15日をどう呼んでいるのかということと全く同じじゃないかということにフツと気付きました。8月15日が終戦記念日と呼ばれてるわけですが、おかしなわけです。戦争が自然に終わるわけじゃないわけで、現実には日本は敗北を認めて終わったわけであって、本来敗戦の日であるはずが、終戦・終戦と言って平気な顔をしているわけです。要するにこれは負けてごまかされてる、鳩山退陣劇と全く同じだと。鳩山個人がおかしいんだという話は、私達が負けたんだということを見ないで済ませるためのピーチクパーチクのお喋りだったんだということに私は気付かされたわけです。どうもこの負けをごまかしちゃうってところに日本の社会や政治に非常に悪い害をもたらしている原因があるなということを考えるようになりました。

そういうことを考えるようになった時に3.11に遭遇するわけです。あの時、私は非常に奇妙な経験をしたと思います。奇妙だというのは身近であんな原子力爆発事故が起こるなんていうのは、全く初めての経験をしているわけですが、にも関わらずこれは見たことがあるぞと思ったんですね、これは見たことがあると。それは何かと言えばあの戦争の時の日本ということですね。あの戦争の時の日本と全く同じじゃないかと。あの何とも言えない、東京電力とか経済産業省とかの面々の、当事者であるにも関わらず当事者に見えない人達、まるで当事者でないかのような振る舞いや態度を見せる人達。

先日東電の勝俣元会長の裁判が報道されていましたが、強制起訴されている。あれも検察は起訴しなかったわけで、検察審査会による強制起訴でようやく起訴になっているわけです。要するに国家側は、起訴したくないという意図が明白ですね。ようやく強制起訴されたわけですが、法廷で何を言ったかという「いや、私は会長ではあったけれども結局原子力発電所のことってというのは、これは現場が

見ている問題だから自分には何の責任もない」と。愕然とします。

かつて丸山真男さんは東京裁判における日本の国家指導者達、戦争を指導した人々の態度を見て「無責任の体系」という概念を作ったわけです。自分がやって自分が下した決断ということに対して、いわばそれが自分の決断、自分がやったことだという精神態度を決して取れない人々。じゃあ、誰がやったんだということになると、「いやあ、何となく」とかですね、あるいは「誰がやったってわけじゃなくてまあ空気ですな」と、こういうシステムですね。これを指して丸山はあの戦争が悲惨だったということだけではなくてあの戦争へと流れ込んでいき、そしてずぶずぶと泥沼へはまっていったそのプロセスの内的論理というものがより一層悲惨であったということ暴露したわけです。彼にとっては、それは彼の同世代はたくさん戦場で死んでいるわけであって、それに対するある種の弔い合戦ということでもあったろうし、丸山自身兵隊に取られていて、だけど病気のために帰されて戦死はせずに済んだわけですけども、まあ一つ間違えば戦死しても全くおかしくなかった。

つまり、この「無責任の体系」と彼が呼んだものというのは、あの時代において言ってみれば人食いマシンのように機能したわけですね。そしてその中に巻き込まれていった個人は虫けらのように引き潰されていったわけです。だから自分を引き潰そうとした怪物を丸山は告発をしたわけですけど、問題はこの人食いマシンが克服されたところか今日でもなお社会のど真ん中で生き続けている、動き続けているということですね。戦後の日本人は、これは

いろんなレベルで、国家のレベルでもことあるごとに、戦後日本はあの戦争への後悔と反省に立ちというようなことを言ったり書いたりということを、何百回・何千回・何万回としてきたと思います。けれども残念ながらそれは本当に言葉だけのことであったと言わざるを得ません。社会全体として見た場合に、反省もしてなければ後悔もしていないということは明らかです。

敗戦の否認＝戦後レジームの死守

というのは本当に反省・後悔しているんだったら、この無責任な体系というような怪物的システムというのは、克服されていなければならないはずですけども、全然それは克服されてないわけですから、現に反省もしてなければ後悔もしていないということですよ。何でこんなに無反省で無後悔でいられるんだろうかと。そこで私は鳩山退陣劇のことで、3.11が全部ストレートに繋がりました。ああそうかと、負けたと思ってないからなんだな、ということですね。あの戦争に負けたと思ってない、私はこれを「敗戦の否認」というふうに呼んでいます。否認というのはもともと心理学の用語ですけども、知識として知っているけれども現実として認めていない、こういう精神状態を指します。だから分かりやすく言うのですね、都合の悪いことは見なかったことにするという心理です。だから、これは非常にありふれた心理でもあるわけで、我々日常生活の中でまあ、やっちゃうことではあるんですよ。小さなことに関してなら否認してもどうということはありませんけれども、大きなことに関して否認をするとすると、あるいは明白なる事実に対して「そんなものは認めん」ということになると、これは病的な状態になってきて、ある種の病気であると言わざるを得ないです。

その例として言えば、時々ストーカー殺人事件なんていう恐ろしい犯罪が起きますけれども、あれは一種の否認が極端な状態になったものというふうに解釈できるかと思うんです。要するに自分はあの娘が好きだと、あの娘も自分のことを好いてくれればいいのにというふうに願望するわけですね。で、ま

二つの出来事（鳩山政権の挫折と3.11原発事故）から見えてきた「戦後の核心」 ＝敗戦の否認

・「敗戦の否認」に戦後レジームの全体重がかかっている。

・「敗戦の否認」のロジック

日本が戦争に負けていないのだとすれば、大義も、勝利の可能性もなかった戦争を始めたことの責任を、誰も取る必要はないし、反省する必要もない。負けたことを認めていないので延々と負け続ける。すなわち、永続敗戦。

その目的：米国によって免責・登用された旧支配層を傀儡勢力として活用するため（属国化）。

あ何とか気を引こうと、いろいろやるわけですがどれも全然気を引けないからますます執着して追っかけ回すんですが、むしろ好かれるどころか嫌われてしまうと。で、ついに決定的な「もう、あなたは私にかまわないでください」というようなことを言われてしまう。そこでブチ切れて殺してしまうと。非常に嫌われているということは、もちろん知っているわけですよ。知っているけれども、そのことを現実として認めるのはあまりにも辛いし耐えがたいので、だからその現実を相手の人と一緒に消してしまおうとして殺害に及ぶ。まあこういった心理であろうと思いますけれども、これはだから非常に否認が重大な状態になってしまったものですね。

これ日本人の歴史意識ということに置き換えてみますと、あの戦争で日本は勝ったんですか負けたんですかと言えば、それは負けたんだということは誰でも知っていることなわけですよ。歴史知識としては知っている。知っているけれどもあんな大戦争に負けるというのは極めて重大な意味を持つわけで、その負けたことが何を意味するのかということを知らないし知ろうともしない。「知らなきゃいけないんじゃないですか」と言われると、「うるせえ、ばかやろう」というふうに逆切れをする。そんなにしてまで、あれだけ重大なことを否認してるわけですから日本人の歴史意識というのは、病的だという気がします。例えば、それがどういう形で表れていくかということ、まさにホットな話題になっている北方領土問題なんていうのもその一つなんですよ。結局突き詰めて考えれば何が問題になっているのかと言えば、サンフランシスコ講和条約でもって日本は千島列島を全島放棄しています。だから、それに沿う形で1956年日ソ共同宣言、これは要するに千島列島全部をソ連が取るということですね、戦争の結果として。で、歯舞・色丹島の二つは千島列島に地理学上含まれないということに、地理学的な常識ではなっておりますので、なのでこの二つだけは返してやってもいいかと、それで手打ちをしようじゃないかというのが日ソ共同宣言の領土に関する概要です。これが要するに詳しくは『永続敗戦論』の中に書きましたけれども、それは気に入くないということで、国後・択捉も返してもらわなければ困

るんだと、それは当然の日本の要求だと、あれはソ連が侵略して取った島じゃないかと主張してきたわけです。

確かにソ連が侵略して取った、それは正しいんです。その通りなんです。しかしながら、他方で国後・択捉も含む所の千島列島を放棄するという文書に日本の代表がサインをしたというのも事実なんですよ。都合よくそのことを忘れて北方四島は全部日本のもので当然の主張だと、こういう全くはつきり言えば常識はずれの主張を何十年間もやってきたわけなんですよ。国民にとってそのことは常識として定着してしまっているし、結局のところ、この敗戦の否認ということに日本の戦後レジームのいわば全体重が掛っていますから、固有の領土などという全く翻訳不可能・不能で国際法的に考えて意味のない概念を日本の外務省は振り回して国民をずっと欺き続けてきたということです。その結果がもう引くに引けなくなっているということです。国後・択捉も返せという看板、これももはや下ろすわけにもいかないということで延々と平和条約が調印できないままに今日に至っている。要するにだから、これはもう敗戦の否認の結果に他ならないわけです。北方領土も典型的ですし、その他竹島問題しろ、尖閣諸島にしろ、領土問題でもめている案件というのは全部これ日本の戦後処理、正確に言えば敗戦処理の問題であります。これが結局のところ敗戦処理なんだということ、このことに目をつぶり続けてるから、これが建設的な形で全然解決できずに今日に至っていると言えると思います。

この領土問題、ある意味安倍さんは政局的に上手く使おうとしています。これデリケートな問題で大変難しいわけなんです。これに対して野党陣営、安倍批判者の側はどう対処すべきなのか、どういう考え方でいくべきなのか、これについては最後の方でお話したいと思います。この敗戦の原因というのはこういうロジックだろうと。あの戦争に負けないんだとすれば、あんな戦争をやっちゃったことの責任を誰も取る必要はないし、反省する必要もない、また自己変革する必要もないということになります。従ってあの戦争をやってしまったシステムがそのまま生き残り続けていて、それは当然また新た

なる敗北を呼び込むことになる。従ってこれは突き詰めて言えば、負けたことをちゃんと認めていないがために延々と負け続ける、すなわち永続敗戦ということでもあります。

どうしてこんなおかしいことになったのかというと、歴史的な起源はわりと簡単に見ることができます。要するにこれは戦後の、占領期のアメリカの方針、いわゆる逆コース政策、民主化と脱軍国主義化というところを最初は重要視していたのが、東西対立が深まる中で反共主義の方が大事だというふうにアメリカの政策が転換をしていくわけです。その際にアメリカとしては、じゃあ誰に日本を治めさせるかという時に登用されたのが旧保守支配層、平たく言えば旧ファシスト達ですね。この方々を通じて日本を救う、つまりアメリカの属国化していくということです。この人達はアメリカのおかげで首の皮一枚繋がって、岸信介さんなんて首の皮が繋がったところか、総理大臣にまでなっちゃうわけですからアメリカ様々という話なわけです。だから、この人達がアメリカ様に対して全然頭が上がらないというのは全くの道理であります。本来なら何でもこいつらがまた偉そうな顔をしてるんだという話なんですよ。こいつら国を破滅させた奴らじゃないかということですよね。まさにそうであるが故に、そう言われなようにするためには、この人達の責任というものが限りなく曖昧化されなければならなかった。最終的には、あの戦争というのは日本人の歴史認識において戦争ですらなくなったんだと思います。敗戦でないことはもちろんのこと、ついには戦争ですらなくなりました。つまり、天災化されたんですね。巨大な台風か何かと同じだと。300万人死ぬ台風が何処にあるんだっていう話なんですけれども。しかしながら結局天災だと。天災化しちゃえば責任の問題っていうのは全部消滅します。「誰をも恨むこともできないよね」ということになっていくわけですね。

大体ですね、この人達は戦争の時には鬼畜米英と国民に言わせていたくせに、戦争が終わるや否やアメリカに取り入ってかつての自分のポジションを取り戻していくという人達であって、普通そういう態度をとる人間というのは売国奴というふうに言うわけですけど、この人達が何をしたのかと、いろんな

旧支配勢力（ファシズム勢力）の再登板によって日本を反共の砦とする、という日米合作のプロジェクト

岸信介（首相1957-60）



正力松太郎、読売新聞社主



研究等々が出てますけれども、やっぱりそれによると、なかなかこの一筋縄ではいかない食えないおっさん、狸親父どもなわけです。というのはこの人達は割り切ったわけですよ。どういうことかということ、もう焼け野原になっちゃったと。かくなる上はしゃあない、アメリカの力を借りて国を再建するというのでやるしかないなというふうに腹を決めたわけです。言ってみれば、この人達が対米戦の対米従属レジームの第一世代でありましてそのレジームの根本を構築した人達だということになります。で、今これが三代目になっているわけですね。岸さんから見て三代目が安倍さん。一応、第一世代においては、対米従属をやるとしても、そこには確たる目的意識はあったわけです。要するにそれは国を再建するということですね。

ところが三代目になると、もう何のたぐいに対米従属をしているのか本当によく分からなくなってくるわけですね。合理性がないわけです。後でちょっと年表的に解説をしますけれども、1990年前後に根本的な転換が起こったわけで、対米従属をしている合理的な理由が消えたわけです。要するに1990年前後までは冷戦構造があって、具体的にはソ連という日米共通の敵がいると。それがいる限りはアメリカは日本を庇護してやる道理があったわけです。だからこそ対米従属という体制を通じて経済発展を初めとしてある種の成功、発展をすることもできたわけですけど、それは共通点があったからこそその話であって共通点が無くなると、アメリカは別に日本を庇護してあげる理由っていうのも無くなるわけです。そうなってくると庇護するどころか今度は収奪の対象になってくるわけですね。これはアメリカの

観点から見れば実に当たり前のことであって、アメリカはアメリカの国益中心で考えるわけであって、冷戦時代はいろいろ本音では文句があっても、まあしょうがないと。こいつ重要な子分だからということていろいろ面倒見てやったわけですけど、育ててやった子ブタは丸々と太ったわけなんですね。なので、よく肥えたなあ、さて美味しく頂こうかと、こういう局面に90年以降入ってくるわけですね。



先年お亡くなりになった堤清二さんが最晩年に簡潔におっしゃっていて感心したんですが、いわく、アメリカは衰退を深める中でその衰退のツケというものをどんどん日本へ回してくるだろう、本当に大変な時代になると、そういうふうにおっしゃってました。まさにその通りだということですね。本来ならばそれに対して抵抗しなければならない。それがこの日本社会におけるエリートの役割のはずです。ですが政治を見ても、経済を見ても、官僚の世界を見ても、メディアの世界を見ても、収奪の攻勢に対して抵抗をするどころか、いわばその収奪のお先棒を担ぐことによって自分のポジションを維持する。こういうのは買弁とか、あるいは売国というふうに普通言われる行為ですけど、こういう立場を取る連中というのが、どんどん増えてきた。だから結局、これは三代目ぐらいになるともう何のためにやっているのかというと、もう自己利益しかないってことなんでしょね。結局この対米従属レジームの中に生れてそれが当たり前だという世界で育って、そしてその中で上手いことポジショニングが取れて、それで利権なり立場なりっていうのを得てきた人、得た人。そういう人々はひたすらその構造を守ると

いうことだけを考えるわけです。

だから安倍さんが戦後レジームからの脱却なんてことを言うのは本当に爆笑なわけですよ。あの人が二度も総理大臣やらせてもらえるなんてなぜでしょう。それはこの戦後の対米従属レジームの中の特権階級として生まれたからに他ならない、それ以外には何一つ理由はない話であって、彼にとってこんなに都合のいい体制はないわけですよ。だから、その都合のいい体制を壊すわけがないわけですね。だから当然彼らの戦後レジームからの脱却というのは、その実状においては脱却どころか死守ではないかということになるわけです。ところが最近面白い展開というのが出てきて、ある意味私は感心しているんですけど、ずっと私言ってきたんです。永続敗戦論以降、いろいろ時事的なことについても発言する機会を得たんで安倍政権の本質は何かと、それは彼の言っているスローガンとは裏腹に自分にとって利益のある戦後レジームというのを何がなんでもどんな手段を使っても守り抜くんだ、死守するんだというのが、安倍さんのスタンスですよということを申し上げてきました。

三代目に見る強さと劣化

ところがですね、最近、対中国それから対ロシアでもって大きな方向転換をしようとしているわけです。これは実質的には安倍さんの思想がどうのこのこのというのではなくて、彼のいわば間合いですよね。そこで起こっている権力闘争、方針を巡る闘争というのがあるんだと私は推論しています。すなわち大まかに言って外務省系、これはこの対米従属レジームを何がなんでも守り抜きたいという願望と傾向が強いと考えられます。どうもしかし、その外務省的な考え方、あるいはそのグループの力が多分弱まってきているんじゃないかと思われます。

つまり、トランプ政権もできる中で、もういい加減これは駄目だと。アメリカに付いていけば大丈夫というのは、ちょっともう成り立たなくなったということで、違う考え方をする人達が方向転換を図らせようとしている。その力っていうのが現在高まりつつあるというのが、この前の安倍訪中における三

原則の表明であったり、それから日口間で平和条約を調印するんだという方針なのだと思います。もうこれ煽っちゃいましたからね。これで何にも出てこなかったら安倍さん失脚する他なくなると思いますから、まあ何らかの結果を出すのでありましょう。そういう方向性っていうのが出てきたわけです。ある意味では安倍さん凄いなあと思うのは、安倍さんが偉いっていうことじゃなくて、どういうことかという、普通こんな展開できませんで、180度変わるなんて。散々これまで対中脅威論を煽りに煽ってきたのに。だってTPPにしても、あれ結局は対中脅威論ですよ。要は環太平洋諸国マイナス中国、これでもって一つの経済エリアを、ブロックを作ろうという企みであるわけで、そしたらアメリカが抜けちゃったんで対中包囲できないということになったわけなんです。これって環太平洋諸国みんなで束になって中国の大国化に対して拮抗、抵抗している、それを抑え込んでいこうというプランなんですよ。

だから結局のところ、あらゆる政策の根拠を対中脅威論に置いてきたはずなのに競争ではなくパートナーと、敵ではなく友人だと、こういうことを言わされたわけです。普通、恥ずかしくて言えないですよ、こんなこと。あまりにも首尾一貫性がないんで、恥ずかしくて言えないと思うんですが、しかし、彼は要するにそんなこと首尾一貫性とか論理的整合性とかは気にしてないわけですから、言えちゃうんですよ。

かつて内田^{たつる}樹先生とお話している時に面白いことを聞きました。内田さんの同級生で検察官をやっている方がいるらしいんです。で、その人と話をしていたら、テレビを付けていてですね、たまたま刑事ドラマをやっていて、そしたらその刑事ドラマを見ながら、その検察官が怒りだしたというんですよ。なんで怒っているかと聞くと、「こんなもん嘘っぱちだ」と言って怒っていると。じゃあ、何が嘘っぱちかって言うと、これは例えば刑事コロンボなんか非常に典型的なパターンですが、犯人は完全犯罪をやるとうとするわけです。完全犯罪をやるとうするんだけど、どこかにその綻びがあって、それを発見されてしまっ、て、「これ、おかしいです

よね」と、「辻褄が合ってませんよね」って言われて犯人は「すみません、私がやりました」というふうに降参して一件落着くと。これは刑事ドラマの一つの非常に有力なパターンと言いますか。その本物の検事さんに言わせるとですね、「こんなことはありえん」と言うらしいんですよ。「こんなの絶対、全然こんなのない」と。

どうしてかという、実際の警察や検察が相手している犯人というのは、その8割、9割が職業的な犯罪者であって、「あなた矛盾してますよね」って言われて、ペシャンクになっちゃうのは、首尾一貫していることとか論理的に整合しているということに対して敬意を払う人間だけだと。だからその人に言わせると、「そんなになるのは、内田、お前たちインテリみたいな奴だけ」で、職業的犯罪者というのは、そういうことに対して全く興味の無い人達なんだそうです。だから、「お前このところ矛盾してるじゃないか」と言って詰めたところで全然、「はあ、そうっすかねえ」って感じで蛙の面に小便だと。「お前、今日言ってることと昨日言ってることが全然違うじゃないか、どっちなんだ」って言われても、「へえ、そうですかねえ、じゃあ、今日の方が正しいってことにしといてください」とか、まあこういう感じだそうで、「こういう人から調書を取るっていうのは実に大変なんだよ」という話をされて、「へえ、そういうもんなんだ」と感心したって話を内田さんから聞きました。

要するに安倍さんとか麻生さん、全くこれと同じで、職業的犯罪者の態度と全く同じなんです。国会でもそうじゃないですか。「あなた、これおかしいじゃないですか」と「これ全然辻褄合っていないじゃないか」と言われたって全然悪びれる様子がないし、多分全然恥ずかしいとも何とも思っていないんですよ。一切そういうの顔色に出ないですから。だから、ここまでは種この自分の整合性の無さということに対して無関心でいられるこのメンタリティーというのは、もう職業的な泥棒とかですね、ああいう類いと全く同じだということです。こういう人達はある意味強いっちゃあ強いですよ。だから、こういう首尾一貫してないことっていうのも平気で出来るということなわけです。

三代目になるとここまで劣化してるという話なんです。二代目はどうかというと、例えば読売グループは二代目で時間が止まってしまっていて、あのナベツネ（渡辺恒雄）さんなんですが、高齢でしかも入院しているようで、このことについて特にリベラル派からは、「ナベツネが亡くなると読売グループはだいぶましになるぞ」という観測が出るとは思いますけど、私は極めて悲観的に見えています。多分、読売グループはナベツネさんがいなくなったらもっと酷くなると思います。

どうしてかということ、それは三代目になるからです。多分、三代目よりは二代目の方がまだましだと思います。よく学生に日本のメディアの話をする時に、読売グループの正力松太郎はこんなキャリアでと言って、二代目になると渡辺恒雄になるんですよ。一代目に比べると二代目はだいぶ小粒になるんですよ。なにせ正力松太郎は日本のプロ野球を作った人だけれど、二代目の渡辺恒雄はじゃあ何をしたのかということ、せいぜいジャイアンツを優勝させた程度で、一代目から二代目とだいぶスケールが小さくなって、三代目になるともっと小さくなる。だから多分、もっと酷いことになるだろうと私は見えています。

従属すらも否認

要するに本当の目的意識というのがないわけですね。ただひたすら、ある種今の自分の現状、自分が利益を得る現状を維持したい、それだけのモチベーションしかない人間というのがトップに就いてしまうような構造が固定化してしまいました。まあ、言ってみればこれは、戦後の「国体」というものが今、末期的な状況に入っているわけですが、だからこれは末期の光景にふさわしいということでもあるのです。じゃあ、なぜ末期なのかということについては追々お話をいたします。こういう具合に、対米従属の構造というのが自己目的化しちゃってるわけなんです。何でそれを変えちゃいけないんですかと問うと、それは変えちゃいけないから変えちゃいけないんだというですね、トートロジカルな答えしか返ってこない。もっと言えば、変えると

というようなことを考えること自体がアメリカに対して無礼であると。これ孫崎享さんから聞いた話ですけども、外務官僚がですよ、日米安保条約を相対化するというようなこと自体がアメリカに対して失礼であるということを実に外交官が言った。そのことを孫崎さんは自分の耳で聞いたと言っていましたから本当なんでしょうけれども。要するにこれって、この対米従属体制っていうのがまさに国体化しているってことですよ。戦前だったら治安維持法でもって、変革ということを企むと死刑にされちゃう、反国体である、反国体罪となるわけです。

このような観点から、戦前戦後を貫くものとしての「国体」のことを書いてみたい、というのがこの『国体論』という本のコンセプトでした。これが今年4月に出しまして現在7万4千部ということで、この類いの本としてはまあよく売れてんだろかなとは思いますが、ライバルは何せ百田尚樹ですから、それだとゼロが一つ違うわけです。これはなかなか勝てんなと思うんです。それで、なぜこういう本を書くことになったのかに関して申しますと、結局、戦後の日本の対米従属の問題を考えていくと天皇制の問題に行きつくだろうということには『永続敗戦論』を書いている時に既に感じていました。ここで強調しておきたいんですけども、私は日本の対米従属の特殊性を問題にしているんですね。「対米従属がけしからん」ということは一切言っておりません。そうじゃなくて、従属していること自体は別に不思議でも何でもなしで、あの戦争で負けてコテンパンに打ちのめされて、「お前言うこと聞かか」と言われて「へい、すいません、言うこと聞きます」と、こういうことになったわけです。

白井聡著『国体論——菊と星条旗』



2018年4月刊行
集英社新書
現在の発行部数：7万4千部

冷戦時代においても、そして現在においてもアメリカに対して何らか依存している国というのは、世界中いくらでもあるわけだから、日本が対米従属していること自体を恥ずかしいとか言ったところで始まらないわけなんです、問題は非常に変な形での従属なんで、世界に類を見ないようなおかしい従属の仕方をしていると、それが問題なんだということを行っているわけです。そのおかしさっていうのは、どういうところに現われてるかということ、妙に日本は日米関係に関しては情緒的な言葉が公的にも用いられるわけです。どういうことかということ、「トモダチ作戦」とかですね、「思いやり予算」とかですね、妙にベタベタして気持ち悪い情緒的な言葉を使う。普通、国と国との従属支配の関係というのは、非常にビジネスライクなものであって、親分からするとこいつを子分にするのは都合がいいから子分にしようということだし、子分から見るとこいつは親分だということ、ずうっといろいろ都合がいいから親分にしよう。まあこういう関係であって、当然これ利害関係の基礎が変われば親分子分関係も見直されて変化をすることになります。

だけれども、日米関係というのはそういうものじゃないんだということをお願いがために、「トモダチ」とか「思いやり」と言った言葉が使われるんだろうと思います。要するに日米関係とはそういう国益の計算というそばに基いた冷たいものじゃなくて、あの酷い殺し合いをやった後に奇跡的に芽生えた友情、和解と友情に基づいているものなんだと、こういうイメージを流布するためにこういう言葉使いがされているんだと思います。なので、要するにこれは、従属とか支配とかそういう嫌な感じの関係じゃなくて真の友情なんだ、あるいは愛情なんだ、愛情に基づくんだというイメージになっているわけです。私はそれを温情主義的妄想と呼んでいます。しかも、日本側が勝手にそういうことを言っているわけです。もちろん、アメリカはそんなふうに見ていない。ただし、日本側がアメリカをそういうふうに見ている方がアメリカとしてはいろいろ便利だから、そのゲームにお付き合いをしてあげると言ってきたわけです。ただし、トランプ政権になりましてそこはだいぶ変わってきた。

『国体論』執筆に至るまでの問題意識

・『永続敗戦論』第三章標題：「戦後の国体」としての永続敗戦
⇒「日本の対米従属の特殊性」とは「天皇制の問題」である。温情主義的妄想に媒介された、従属を否認する従属。

・天皇制（戦後の国体）によって蝕まれる現代日本社会
⇒親米保守支配権力の限界の露呈とその死に物狂いの権力維持
⇒安倍政権の無能・不正・腐敗と、国民・政官財学からの支持
～民主主義の空洞化・忖度ファシズム

トランプはそういう面倒くさいんだと、ややこしいんだと、「俺はもっと言いたいように言うし、やりたいようにやるよ」というふうに出てきたんで、いろいろだいぶ面白いことになってきているわけなんですけれども。

だから言ってみれば、従属の事実が否認されるということになります。私はこれが「ああ、なるほど」と、戦前の天皇制とそっくりだと、そこに感じていたわけです。どういうことかということ、天皇制もいろいろな特徴はありますが、私が一番大事だと思っているのは家族国家観といわれるものですね。天皇が「大日本帝国下においては、国民は天皇陛下の赤子（せきし）である」という表現がよく用いられました。要するに天皇というのは何なのかということ、一見西洋の王様とか中国の皇帝というものと似ているように見えるけども違うものなんだということ、当時の国体イデオロギーとしては唱えたわけです。どうしてかということ、皇帝とか王様というのは上から支配する存在だけれども、天皇陛下というのはそうじゃなくて、いわばお父さんのように上からみんなを慈愛に満ちて見守ってくれる、そういう存在なんだというイデオロギーが作られたわけですね。その天皇は神の子孫、あるいは神そのものであるというふうに観念されたわけですから、神様がその神の子孫が自分のことを自分の子供のように愛してくれているんだと、ああ何というありがたいことだろうか、日本人に生まれて本当に良かったなあというのが、大日本帝国の共有されていた物語だったということです。

これは非常に大きな問題をはらんでいます。それによって非常に特殊な社会観と言いましょか、近

代のスタンダードからはずれるような社会観、個人観というのが生まれてしまいました。非常にこれはまずい、理論的にまずいのは、家族の人間関係をそのまま拡大して国家における人間関係っていうふうアナロジーするっていうのは、おかしいわけですよ。かつ、拡大する家族観がそもそも変な家族観なわけです。どういうことかという、家族というのはみんな自然と仲良くするもんだと、家族内の人間関係っていうのは調和してるんだという前提が置かれてるわけですけど、おかしいですよ。家族というのはそんな単純なものじゃなくて、様々な葛藤や支配・対立というものがあるものですよね。だけど、そのことを否認するわけです。いや、そんなことはないんだ、家族というのは自然にみんな調和しているんだという、要するに理想の家族像だけを挙げて現実の家族というものを見ようとしな。で、その間違っただけを無理やり国家レベルにまでに拡大してしまうという、二重の誤りをおかしている。

かつ、このイデオロギーが強力なものになったのには理由があります。どういうことかという、我々の国は他の国と全く違うんだ、なぜなら一つの王朝がずっと途切れることなく続いているんだということを言ってたわけですね。じゃあなぜ諸外国では、王朝が何度も引っくり返されて交代したり、あるいはフランスのように王朝そのものが「いらねえ」ということになったりするののかという、それは結局上から支配する君主だからだという理屈です。上から支配する君主なので、いろんな恨みを買うことが多くてひっくり返されてしまうということがそこでは起こっているのに対して、天皇陛下というのは上から支配するような君主じゃないくて、あくまで人々を慈愛でもって見守る存在なんだと。だから今迄、決定的に恨まれるということが起こらなかった。そのためずっと同じ王朝が続いてきたんだという美しい物語なんですね。

だけれども、本当にこの転換をもたらしたものは深刻だと思います。例えば、現在に至るも日本では権利って言葉を理解できていないと思います。利権は分かるんですよ。利権は分かるけど権利は分からない。あるいは社会という言葉を理解しているんだ

ろうかという、多分理解してないと思うんです。なぜなら、個人がないからです。個人がない世の中において社会というものは存在し得ないので、だから日本では社会というものが正直よく分かってないまま使っていたと思います。一方、皮膚感覚で分かるのは会社ですね。会社は分かるけど社会は分からない。なぜこうなんだろうか。一応、日本の近代が明治維新を起源と考えたら150年以上になっているのになぜ未だにこうなんだろうかと思うわけですが、それはやっぱりこの天皇制イデオロギー・国体イデオロギーの問題というのがあると思うんです。

「国体イデオロギー」の呪縛

というのは、近代社会の理論、西洋からきた理論というのは典型的には、例えばホブズの理論では、どういう人間像から始めているかという、とてつもないエゴイストだということから始めているわけです。人間というのはとんでもないエゴイストで、どのくらいエゴイストかという自分の利益のためだったら何でもやると。何でもというのは文字通り何でもであって、殺したり盗んだり騙したりということを全く当たり前のようにやる、それが人間だというわけです。そのようなエゴイズムの塊であるところの人間が何人も一緒にいたら何が起こるかという、バトルロワイヤル状態になっちゃうわけですね。戦争状態のようになるんです。それでは非常に悲惨なので、お互いにエゴイズムの一部を捨てて、それで秩序を作りましょうという約束をする、それを社会契約と呼んでいるわけです。その際に権利というのは何なんだという、結局、人間の限らないエゴイズムっていうのは基本的には衝突するもんなんだという前提を置いた上で、それを調停するためにここまでは正当なエゴイズムですよと、ここから先はやりすぎですよということで、どこかでエゴイズムに線を引くということですね。線を引いて正当化するエゴイズムのことを権利というふうに定義する。権利という概念はこういうものの考え方、文脈の中からヨーロッパで生まれて来ているのだと思います。

じゃあ、国体イデオロギーではどうなのかという

と、日本人にもエゴイズムなんかないわけではないけれども、日本人っていうのはみんな一つの家族なので、エゴイズムもそここのところで抑制されて調和するようになってるんだという理屈を立てるわけですね。なので、このような前提に立つと権利という概念がそもそも必要ないってことになります。だから、結局今日に至るまでちゃんと理解されていないってことになるんでしょうけれども。安倍政権になってから本当に顕著だと思いますが、権利が毀損されている、あるいは不当に奪われている、こういうふうにした人達が「権利をよこせ」とか、あるいは「回復させよ」ということで声を上げることがあるわけですが、これに対して日本社会は、どんどん冷たくなっていると感じます。なぜそうなるんだろうかと考えてみた場合に、そもそも権利の概念が理解できていないし、必要だとも思っていないわけですから、従って全員潜在的に無権利状態にあるということだと思えますね。全員が無権利状態であるような状況において「俺に権利をよこせ、我々に権利をよこせ、我々の権利を回復しろ」、というふうにし高に叫ぶ人がいると、どう見えるでしょうか。これは特権を要求しているように見えちゃうわけなんです。なので「あいつらけしからん」と、もの凄い集中砲火のバッシングを浴びるということになる。こういうわけで国体イデオロギーというのはもの凄く今日まで日本の社会、日本の世の中に対して悪い影響を及ぼしてらるんだらうなと思います。

そして、そのような形で「国体」がなぜ生き延びることができたんだらうかという、それは日米関係の中に「国体」を再建しちゃったからなのではないか。本当は解体されるはずだった「国体」を再建しちゃったということであって、そして、そういう意味からも日本の対米従属、異様な対米従属というのは世界においても類を見ないわけです。どこの国だってアメリカに依存・従属してる国は、自分達は従属を強いられている、あるいは依存を強いられている、そしてそれが故の不自由があり制約がある。このことを当然自覚しているわけですが。日本人だけが多分そのことに対して全く自覚がない。これははっきり言って人間として低級であります。要するに奴隷状態が素晴らしいと思っているわけですよ

ね。奴隷状態であるということに全然意識していないし、私は『国体論』の中で本物の奴隷の話をしてるんですけど、奴隷であることに自覚があつて、そして隙あらば逃げ出そうと、主人を殺しちゃおうと思ってる奴隷っていうのは、本物の奴隷じゃないわけです。

本物の奴隷というのは、自分が置かれている状態がこの上なく素晴らしいものと考え、そして近くを通りがかった人が、「いやあ、君気の毒だな、犬のような状態じゃないか」とか、「つながれとるのかね」とか、「自由になったらどうだい」などと、言ったりしたら非常に不愉快に感じて、自分はこんなに良い状態にいると思ってるのに、君の状態は情けないとか、見苦しいとか、何て不愉快なことを言うんだと。気に食わんということで、その自由人に対して憤懣をぶついたり、「黙れ、このやろう、お前もつながれよ」と、こういうふうにする舞ったりとか、今、そういう日本人のメンタリティの傾向に加えて、インターネットの発達でもって、インターネットの言説空間の中で増幅されて本当に酷いことになっている、というのが今の日本人の精神状態だと思います。

だから本来対米従属なんていうのは、対外関係の問題にしか過ぎないもののはずですが、ところがこれが日本社会を内側から蝕むものになってしまいました。奴隷根性と反知性主義。反知性主義は同じ文脈から説明できます。『国体論』の中で私は、聖書のある言葉に着目しているんですけど、それは旧訳に出てくる「死を畏れるのは知恵の始まり」という言葉です。私は神学をちゃんと勉強したわけじゃありませんから素人考えなんですけど、何で死を恐れると知恵が始まるということが結び付くのか私なりに考えてみると、人間というのはたいがい漠然と自分は自由だと思っているわけですね。自分は自由な存在だと思っているわけなんだけれども、その絶対的な神の存在というものに気づくと、自分は実は全然ちっとも自由ではなかったということに気づかされる。曆を動かすのも実は主の絶対的な意志であつたんだということを思い知ることになる。そうすると、当然主は恐るべきものだということになります。結局、自分の運命というのは全部その絶対的

な神が握っているんだということになるわけですから恐るべきものだ。同時に、じゃあ主はいったい自分に何をさせようとしているんだ、主は自分に何を望んでおられるのか、このことを知らないわけにはいかないということになってきますね。何とかしてそれを知りたいということになる。知りたいというところから知性の運動が始まる、知恵が始まる。そういうことなんだろうと私は解釈しています。

これは裏を返せば、漠然と自分は自由だと思い込んでいる限り知恵は絶対始まらないということですよ。かつ自分の不自由さを自覚することもないから、制約を受けてるということも自覚することがない。自由でない制約を受けているということに自覚があれば何とかして少しでも自由になりたい、あるいは制約を減らしたい、そのためにはどうしたらいいんだろうと、知恵も始まるでしょうが、その自覚がない限りずっと漠然と自由があると思いつけている限り知恵も始まりようがないということですね。だから、そういう本当に末期的な状況が結果として生まれて、現在進行形で展開している。こういうことを考えて「国体論」を書こうと、「国体」の歴史を通して明治から現在の歴史を書けるはずだという準備をしてたんですが、そのさなかで驚くべきことが起こりました。それは何かというと、2016年8月の天皇のお言葉です。こんなに思い詰めているのかと思ってびっくりしましたが、しかし、一方で「必然だな」とも思いました。そりゃこまで思い詰めるのも無理ないわと。まず第一に言えることはですね、国難の時代なんだということを私は痛切に感じたわけです。

どうしてそう言えるのか。これ左側の写真は、佐藤栄作が左側で真ん中に昭和天皇、右側に吉田茂が映ってますけど、何かの式典があってこの3人が一堂に会してる一瞬を切り取ったものだったと思われるんですが、この写真では、昭和天皇がもの凄くいい笑顔を浮かべてるんです。本当に破顔一笑という感じです。こんなに嬉しそうに笑っている昭和天皇の画像も映像も僕は見たことがありません。これは言ってみれば一つのシンボルだと思うんですが、天皇制というのはよく権威と権力の分離のシステムだ、分業システムだといわれるんです。つまり、天

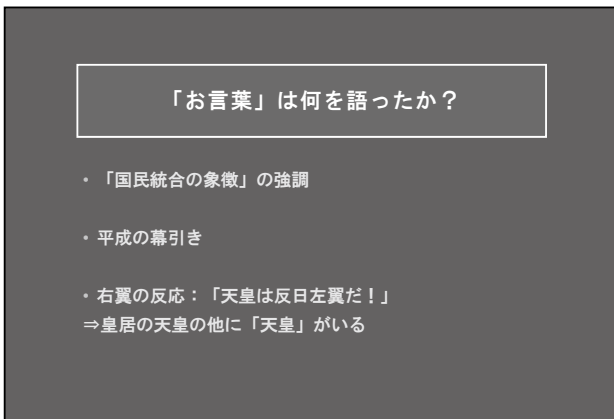
皇というのは権威、それも実力を伴わない形式的な権威であると。稀に実力を兼ね備えるという場合もあったわけですが、それはむしろ例外的な状況であって基本的に形式的には権威だと。実質的な権力の側、これは征夷大將軍だったり、あるいは総理大臣だったりするわけですが、これら日本の天下人というのはこれまでどちらかという、自分で権力だけじゃなくて権威も兼ね備えちゃえということで、天皇を排したり、自分自身が権威になるっていうことはしなかった。それはだから天皇制の権威と実際との権力の分業システムだということですね。世の中が上手く行って平らかに治まっている時、平和な時代というのは、権力と権威が良好な関係で協調して国をまとめるという、そういう状況になります。時は高度経済成長の時代、焼け野原から立ち上がってぐんぐんと国力は上がっていく、そういう時代ですよ。対米従属レジームが上手いこと成功を取るわけですけど、まさにそれを作りあげた張本人達3人が集まって談笑をしているわけですが、これは権威と権力が上手いこと調和している状態のシンボルの写真として見れるんじゃないかと思えます。

今度は右側の写真をご覧ください。これ今上天皇が剣呑な目つきをなさってるというふうには私思うわけですけど。これは多くの人が気付いていることなわけですけど、安倍政権発足以来、これまで事あるごとに天皇だけでなく皇后を含めて、歴史の問題、あるいはその国家が講じる平和主義の価値観、こういった事柄に関して様々なメッセージを、ダイレクトではないですけども、いろんな機会を捉えて仄めかすということをしてきたわけで、はっ





きり言えば首相官邸と朝廷が対立してるということが見えてきたわけです。それが、このお言葉によって決定的に見えてきた。この権威と権力が調和している時代というのが安定した時代であるのに対して、日本史に置いて何度かこれは経験されてきていることですが、権力と権威が葛藤を起こして対立、場合によっては闘争をするという状況が起きて重大な変化というものがもたらされてきました。そういう形で変化が起こるとするのは良いことなのか悪いことなのかは分かりませんが、とにかくそういう事実があります。



- ・「国民統合の象徴」の強調
- ・平成の幕引き
- ・右翼の反応：「天皇は反日左翼だ！」
⇒皇居の天皇の他に「天皇」がいる

そして、そのような時代というのは当然激しい混乱・動乱の時期であり、国難の時代であったわけです。だから私は天皇のお言葉というのは、テレビで見ましたが、「ああ国難の時代なんだなあ」ということを、非常に身に染みて感じたわけです。何を語ったかということも重要なんですけど、何よりも大事なのは象徴である天皇は一体何を象徴するかという点について、国民統合の象徴なんだということを強調されたのが非常に私には印象的でした。何でそんなに統合の象徴ということを繰り返して強

調しなければならないのかと言えば、それは統合が現に薄れてきているからに他ならないと思います。そして、ああいう形で天皇が位を去るといういうことは平成時代が幕を引くということを意味しているわけなんですけど、じゃあ、平成時代って何だったんでしょかという、端的に言うとな国民統合がずたずたになってきた時代だったということだと思いません。1990年前後に大きな転換がありましたけど、これは世界的には冷戦構造の終結、ソ連の崩壊等、東側圏の崩壊による東西対立の終焉ということでしたが、日本国内的にはバブル経済が弾けることによって、それまで戦後の日本経済は、永久に成長し続けるんじゃないのかと何となく思ってたわけなんですけども、それはないということが明らかになった。つまり、経済が右肩上がりであるという前提がそこで崩れたわけです。そのように、客観的構造の条件というのを含めて二つ大きな転換になった。それと全くこれは偶然のことでありますけれども、1989年に昭和天皇が亡くなったわけで、この二つの転換と昭和天皇が亡くなったということは、ほぼ同時に起きているんですよ。

結局、平成時代って何だったのかということ、経済はもう伸びなくなったということと冷戦構造が終わったということ、この大変化に対して然るべき対応をしなければならなかったのに、それができないまま時間を空費してきたというのが、結局のところ平成時代だったのでしょうか。だから、将来の日本人がこの平成時代というものをどういうふうに振り返るだろうかという、何というバカな時代なんだろうかと、この頃の日本人ってバカじゃないだろうかと、多分そういうふうに見られる時代になるんだろ



うなと思って、今から私は悲しい気持ちになっています。だから、時代の幕引きを図るといのはもうこんな時代を終わらせようというメッセージだったとも言えるだろうと思いますし、失われた20年という言葉がありますけど、それは失われた30年に繋がるわけですね。要するにこれって、失われた30年ってほぼ平成全体と重なりますから、平成全体が失われた時代だということになるわけです。で、このお言葉の表明を通じて対立ということも、権威と権力の対立ということも表面化してきましたけれども、問題なのは右翼の反応です。以前から、お言葉が出る前からネトウヨの界限を中心に右翼の人たちが何と言ってるかということ、今上天皇が大嫌いなわけですね。この今上天皇って実にけしからん、反日左翼だなどというわけですよ。左翼っていうのは、どういう定義なのかということ、彼らの考えは多分、共産主義者の末裔ってことになるでしょう。では、共産主義者とは何であるのかということ、共産主義者というのは、かつては天皇制の廃絶ということを書いてたわけで、これは、天皇制から見ると不倶戴天の敵ということになりますね。だから、こうやって見ていくと、天皇は反日左翼だから、天皇は朝敵だということになるわけですよ。だけど天皇は朝廷そのものなのですから、天皇が朝敵なることは論理的には不可能である。しかし、彼らはそう言っているわけなんですね。ということは、何なんだろうと考えると、彼らにとって今、東京の皇居にいる天皇陛下以外に本当の天皇がいるんだろうなというふうに推論せざるを得ないわけです。じゃあ、その天皇というのは何処にいるんだろうか。多分それはアメリカということになる。

結局のところいつのまにか入れ替わってしまったんだなと、それはじゃあ、どうやって始まったんだろうか。多分私は昭和天皇とマッカーサーの有名な会見、そしてそれをめぐって日本人がどういう神話を作ってきたかということに重大なことが隠されていると思います。この時、昭和天皇はマッカーサーに対して「戦争の全責任は私にある。私の身はどうなってもいいから苦しい国民を助けてやってほしい」と言ったんで、マッカーサーが非常に感動し

て、という話が日本人は大好きなわけですけど、恐らく私達はそこに対米従属をしていていいんだという道理を見つけているんだろうと思います。そして、さらに言えば単なる従属じゃないんだと、美しい物語をそこで作ることができるんだと思います。要するにこのエピソードは、マッカーサーは日本人の本当の心を理解してくれたというストーリーになるわけですね。だから、数か月前まで鬼畜米英だと言ってやっていて、特攻機に乗った青年たちは「後に続くを信ず」と言って突っ込んで行った。後に続かなくていいんですかというのが本来あるはずなんです。なぜアメリカに対して抵抗しないのか、抵抗しなくていいのか。それはこの物語によっていわば正当性が与えられるわけです。いや大変それはいいことだと、アメリカは実は敵ではなかった、なぜならちゃんと彼らは日本人の心を理解してくれるからだ、という物語を作るわけです。

相似する戦前と戦後の「国体」

こういう形で、アメリカ国体となってしまったものを奉じてきたわけですが、そのように見ると戦前戦後の歴史の構造がパラレルに展開している姿というのが見えてくると私は思っています。その考え方に基づいて、根本的に『国体論』の歴史記述はされています。どういうことかということ、私達はこの150年の歴史を1945年のところで区切って、マラソンで折り返し地点みたいな感じで捉えて、この明治維新から現在までの歴史像っていうのを抱いているわけですけど、「国体」の観点から見るとそれぞれ三つの要素を挙げることができ、それが全

国体とは何か？

- ・ 幕末期水戸学に起源、明治政府による公式イデオロギー
- ・ 戦中のファナティックな国家主義を支えた天皇観念：国体明徴声明（1935）、国体の本義（1937）
- ・ 主要特徴：万世一系、天壤無窮、八紘一宇
そして、国民＝天皇陛下の赤子；家族国家観（支配の否認）
⇒ 独特の社会観・人間観の発生
- ・ 「国体の変革」はタブー（治安維持法）

くの並行関係にある。つまり、まず明治期に「国体」が作りあげられる。様々な問題もあるんだけど、それを押さえつけた形で天皇制、天皇の国としての近代日本ができていく。そして、それは理想を追求した時代でもあるわけです。非常に国家目標がはっきりしているわけです。どういうことかというのと独立を維持しなければならない、そして一等国にならねばならないと、その一等国になるということとは当時にあった帝国主義国家になるということだったわけですね。その目標というのが日清・日露戦争でもって一応達成されるわけです。そうして国家目標が達成されると、ある種当然緩みというのが出てきます。何でこんなに頑張ってきたんだと、それは楽をするためだという話なわけで、それで大正デモクラシーの時代になるわけです。いわゆる天皇を頂点にいただいた藩閥政府、このような権威主義的な形の支配というのが大正期においては緩むわけです。大正デモクラシーということですね。それは天皇と国民という関係性という観点から見ると、明治レジームは形成期においては、日本国民は天皇の国民としてそのアイデンティティを与えられたわけですが、大正期は天皇の影が薄くなったわけです。なのであたかも天皇など存在しないかのごとく、天皇なき国民という時代になってくる。

この大正期に民主主義と自由主義の傾向が強まったわけで、そのままスタンダードな近代主義的な国になれば良かったんですが、そうはならなかった。そうはならず昭和のファシズムの時代になってしまうわけです。そしてその結果、結局「国体」が崩壊、大東亜戦争によって「国体」が崩壊することになっていったわけですが、国民と天皇の関係ということからしても、ファシズム思想の中から国民の天皇という観念が出てくるわけですね、北一輝が唱えてた観念です。言ってみればこれは天皇をいただいたデモクラシーということだったんですけど、それでもってその思想というのが二・二六事件という企てをも引き起こすことになるわけなんです。結局これは、ある意味国民の天皇という考えが多分一つの不条理にしかすぎなかったのでしょう。天皇自身によってそれを拒絶され二・二六事件は潰えていくわけです。そしてその後、「国

「菊と星条旗」の意味

- ・ 公式史観：敗戦を契機とする諸改革＝国体の廃絶、象徴天皇制の導入
 - ・ 現代史の謎：「朕茲に国体を護持し得て」（玉音放送）、「国体は毫も変更せられない」（吉田茂）は、ありえたのか？
 - ・ 実態：フルモデルチェンジによる再編・生き延び
- それはどのような再編だったのか？

体」が破滅をしていく。

じゃあ、戦後はどうなったか。敗戦～占領から1970年前後ぐらいまでは、戦後のアメリカを頂点とする「国体」の形成期だと、明治がそうであったのと同じく、そういうふうに捉えられるだろうと思います。どういうことかということ、非常に混乱した時代でもあるわけですね、60年安保もありましたし、対米従属レジームが固まっていく時代だって言うけれども、それは同時にそんなのは嫌だっていう動きも非常に強烈な物としてあった時代なわけです。それを日米の支配権力は何とか押さえつけることに成功して、安定した対米従属体制というのを作りあげていった時代であります。やはりこの時代も明治時代に似て国が凄く発展した時代でもあるわけです。焼け跡から一気に経済大国と呼ばれるまでステップを駆け上がっていくわけですね。だから、天皇のところにアメリカが代入されるということになりますから、アメリカの日本ということになります。敗戦占領期なんてまさにアメリカの日本ですね。非常に著しく対米従属という構造下あるわけです。

1970年前後から1990年前後というのが大正デモクラシーの時代に相当するわけです。どういうことかということ、その形成期においてグリーンと力を伸ばしたわけで、そうすると天皇の影が薄くなったという時代に対置すれば、別にアメリカに支配されてるということのリアリティがなくなってくるわけです。あたかもアメリカなんか存在しないかのように、そしてジャパン・アズ・ナンバーワンなんて呼ばれてですね、「アメリカなにするものぞ」って感じにもなるわけですね。それだけ力を蓄えたんだっ

たら、それで対米比率を下げれば良かったものを、そうならずに対米従属をしている理由、合理的な理由が消えた後の時代においてこそ逆に対米従属が深まって現在に至るわけです。それは1990年前後から現在に至る状況です。これは言うなれば、「国体」の崩壊期に相当するわけで、その中で新しく「日本のアメリカ」という観念が出てきていると思うんですよね。

**世界に類を見ない（万邦無比の）
《特殊な》対米従属体制（戦後の国体）**



昭和天皇の「無私無私」に感動する（？）
マッカーサー元帥

「私は米国を愛するがゆえに日米同盟の仕事を喜んでやってきた。多くの日本の友人がいるが、日本を愛するがゆえに私が何かをすることは出来ない。何が米国の国益かを私は知っている」（リチャード・アーミテージ、2013年4月）

例えば、現在の核兵器廃絶運動に関する日本政府の態度の取り方なんていうのを見てみると、要はアメリカ様の核兵器に対して文句を言うことはできない、ということですよ。私なんか思うのは、確かにある意味安全保障の戦略上、公式的には日本はアメリカの核の傘に入っていることになっているのでしよう。公式的にはなっているけれども、何でそこまでアメリカの核ってものを信じていることができるのであろうか、というのが私が実に不思議だと思点なのです。核の傘と言っても、いざとなればアメリカはその核兵器をどこに使うことだってできるわけであって、なんせアメリカは1回使った。それも日本に対して使ったことがあるという実績も持って

『国体論——菊と星条旗』の提示する歴史の反復

- ・ 「戦前の国体」（1868～1945）
明治期：国体の形成期／天皇の国民／理想の時代
大正期：国体の相対的安定期／天皇なき国民／虚構の時代
昭和前期：国体の崩壊期／国民の天皇／不可能性の時代
- ・ 「戦後の国体」（1945～現在）
敗戦・占領期～1970年前後：国体の形成期／アメリカの日本／理想の時代
1970年前後～1990年前後：国体の相対的安定期／アメリカなき日本／虚構の時代
1990年前後～現在：国体の崩壊期／日本のアメリカ／不可能性の時代

いるわけで、よくそんなにアメリカの核兵器っていうのを親米保守の連中は心の底から信頼できるなあと思うわけなんですけど。多分、「日本のアメリカ」という観念がそこに隠れてるんじゃないか。どういうことかという、アメリカの核兵器というのは「日本のアメリカ」だから、「日本のアメリカ」の核兵器はイコール日本の核兵器だということになるんでしよう、多分。なので、信じているんじゃないか。ありえないと私は思うんですけど。だから、これは単に不可能なんだと言えます。



こういうふうに見ていくと、面白いのは戦前の「国体」が始まりから終わりまで77年間の時間が流れています。それに対して戦後の「国体」、戦後は長くなりました。もうすぐ2022年を迎えますと、ちょうどこれも同じく77年間になります。ですから、今のアナロジーで考えていくと現在私達がどういう地点に立っているのかと非常によく見えてくると思うんです。どういうことかという、まさに私達は「国体」の崩壊の時代を生き、そしてそれを見届けているのでありましようから、こんなに酷い世相なのでしよう。だから太平洋戦争に入っ

**「戦後の国体」の崩壊期に
ふさわしい政権としての安倍政権**

- ・ 「愛してるふり」から「軽蔑と憎悪」へ（トランプの「アメリカ・ファースト」）
- ・ リアルなものの露呈：TPPから日米FTAへ
- ・ 国家の私物化（象徴としてのモリカケ問題、憲法改正）
- ・ 統治の崩壊
- ・ 国民のマインドの低下：安倍政権の長期本格政権化、戦後の国民的コンセンサスの崩壊

『国体論——菊と星条旗』から見る 憲法論（明治憲法レジーム）

・戦前の国体（明治憲法レジーム）の二重性

久野収+鶴見俊輔：明治憲法の「顕教」と「密教」
大衆向け：神聖皇的存在としての天皇（天皇主権説）
エリート向け：立憲君主としての天皇（天皇機関説）
⇒昭和ファシズム体制とは、前者による後者の呑み込み

て、もうどうしようもなくなっている時期と重なって見えるわけであって、ああ現在は悲惨なので当然ねということにもなるわけです。しかし、でもそんなに暗くなる必要はなくて、マルクスが言ってますけれども、一度目は悲劇、二度目は茶番だと。これは『ルイ・ボナパルトのプリュメール 18 日』の中に書かれていて非常に有名ですけど、実は若い頃のマルクスはこの言葉に言及をしていて、どうも若い頃から凄く好きな言葉らしい。で、若い頃彼は何と言っているかという、ギリシャ悲劇において神様が殺される。しかしその同じ神様が今度は喜劇に登場してまた殺される。何で悲劇的に死んだ神は喜劇としてまた笑われながら死んでいかなくちやいけないんだろうかということマルクスは問うています。マルクスがそこで言っている答えは、「これは、その人間は過去と朗らかに別れを告げるためである」と。むしろそこで神が象徴してるのは、例えばある時代の何か一つの時代精神というようなものを象徴していると見ているわけですね。だからその神が死ぬというのは、ある一つの時代の終焉ということを象徴するのではないかと思います。

で、その古きものと喜ばしく別れる、それも楽しく朗らかに別れるべきなんだと。そのような力強さがギリシャ人の力だったということを言っています。多分、私達は同じなんだろうと思います。「国体」というのはある意味、近代日本が創りあげてしまった怪物であり、ある意味それは宿命だったのかも知れません。それは、一度大失敗をして粉碎されました。粉碎されましたけど、しかし私達は結局それを、日米関係の中で再建をするという大変奇妙なことをやって 70 年余りを過ごしてしまいました。

ただもうそれは本当に限界にきているということですね。ある意味では、何をまだバカなことをやってるんだと言えば、それはそうなんだけれども、酷い状態というのは滑稽ではあるんですが、まさにその滑稽であると見ることによって、ついに私達は本当の意味で「国体」という物とお別れができる。二度死ぬことによって「国体」は本当に今度こそ死ぬことになるだろうと私は思います。そういう意味では私達の前途というのは大変明るいとも言えるでしょう。

『国体論——菊と星条旗』から見る 9 条と日米安保体制（戦後レジーム）

・戦後の国体（平和憲法・日米安保体制）の二重性

建前：9条を持つ平和国家

本音：アメリカの軍事的世界戦略に奉仕する同盟者

⇒集団的自衛権行使容認に代表される米日軍事力の一体化は、後者による前者の呑み込み

・覆い隠せなくなってきた矛盾

米軍基地の機能：特にソ連崩壊以降、日本を守るものではなく、アメリカのグローバルな軍事戦略にとって最重要の施設。

矛盾の起源：「天皇制の存続」は、「絶対平和主義」と「米軍駐留」（安保体制）を要求。「軍隊でない軍隊」と沖縄の犠牲性によってこの矛盾を隠蔽。

北方領土問題を考える視座

最後に一つだけ生の政治的な話題を補足しておきたいと思います。今、北方領土問題が出てきて、来年、衆参同時選挙も十分ありえるだろうと、そういう政局のイメージになってきてますけど、さすがにやっぱり安倍自民党上手いですよ。結局、外交問題は根本的には政府にしかできませんから、野党は外野で騒いでいるというだけになってしまうわけですね。しかも、どうも二島返還で手を打つようだとい

朝鮮半島危機への対応に見る 「平和主義」の空洞化・崩壊

・核・ミサイル危機の緊迫における日本政府の振る舞い

米：「すべてのカードがテーブル上にある（先制武力行使も辞さず）」

日：「100%共にある！」「もっと圧力を！！」「北朝鮮と断交せよ！！！」

米・韓・中・朝：「対話で解決しよう」「朝鮮戦争を終結させよう」

日：「安易な対話に反対！」「核・ミサイル・拉致の包括的解決を！！！」

・「包括的解決＝朝鮮戦争の終結」を理解しない、つまり朝鮮戦争終結を望まない

・「朝鮮半島の非核化」への不満：一方的な優位性を確信できる状態でのみ肯定される「平和主義」



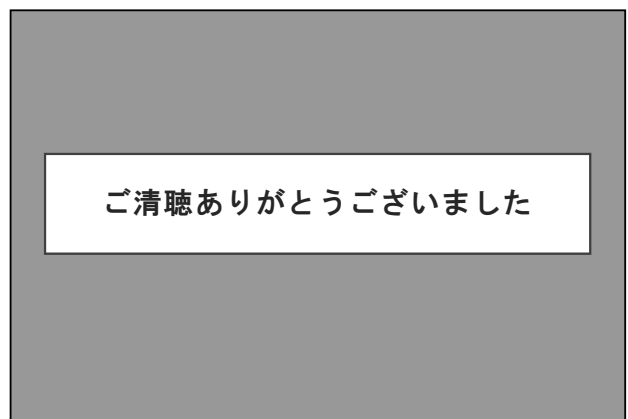
うふうに今はなってきた。これは私が永続敗戦論で描いたような理屈からすれば結局そうなる他ないんだという、ある意味正しい解決なんです。しかしながら、野党の側は反対するとなると何を言わなくちゃいけないかということ、立憲民主党の枝野さんは「四島というのは絶対に譲ってはならん」と言っています。それって産経新聞の主張じゃないですか。それから共産党、共産党は歴史的経緯からすれば最も原則的な立場なんです、北方領土というのは国後・択捉だけにとどまるものじゃない、千島列島全てが本来日本の領土だと言っています。なぜならあれは武力によって手に入れたものではなくて、明治時代の樺太・千島交換条約によって平和的に日本の領土になったものであって、従ってポツダム宣言を受託したからといって失う道理はないのだ。なので、カムチャッカ半島の手前まで全部日本のものだと言っているわけですが、これ原則的には正しいです。原則的には正しいけれど夢物語です。



こういう具合に、言ってみれば、安倍さんが二島で手を打つということになると野党の側は極めてある意味右翼的な主張をどんどん前面に打ち出してい

くことになるんですね。だけどこれは、もうあまりにも分が悪いです。分が悪い。そんなことできやしないということが分かりきっている話だし、そして枝野さんがその「四島の線は、絶対に曲げるな」ということを言ったっていうのは、なんでしょうね、勉強不足ですね、はっきり言って。そんなのは無理筋だということはちょっと勉強しただけでも分かる話なのに、今どきそのくらい知つとけよという話なんです、はっきり言っちゃえば。それなのに産経新聞みたいなことを言ってる。言うべきは、結局この線で解決するしかなかったというのは別に今年になってそうなった話ではなくて、もうこんなのゴルバチョフと父ブッシュの時代に冷戦終結宣言がされて以降、ここを落とし所にできるというのは、それ以降ずっとそうだったんですよ、30年以上。だから時間を空費したじゃないかと日本の政府は、自民党はと。このことを批判するべきであって、今、四島返還に固執するべきだなんて言ったって、バカじゃないのということに結局なりますよ。そして結局は安倍さんのペースにもっていかれるでしょう。

そのことをやっぱりきちんと市民の側から訴えていかないといけないと思います。まさに今、本当の野党に求められているのは、この永続敗戦レジームあるいは戦後の「国体」、これを乗り越えてこれに取って代わる中核となる勢力、その塊でありますから、そのためにはまさに敗戦の否認の産物でしかない北方領土問題なんていうものは、きちんと理と筋道を立てて乗り越えなくちゃいけない。そのことを最後に訴えておきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。



司会 時間をフルに使っていただきまして熱弁を振るっていただきました。大変ありがとうございました。時間が押しておりますが、お一人だけ質問を受け付けたいと思いますがいかがですか。はい、どうぞ。

会場 今日のお話は、自立ってということをお話しされたんじゃないかと思います。それで西洋ではエゴイストから国家が始まるという話をされてまして、日本で今更そこに戻って自立ってというのは可能ではないと思うんですよ。どういうふうにしたら自立ができるのかってことについて先生のお考えをお伺いしたいんですが。

白井 できる、できないじゃなくて、できないとどうしようもないことになるというか、それなりの報いというのを受けることになると思います。というのは、今の在り方というのは、あまりにも醜悪なので人間として低劣であるというふうに世界中から見なされていく危険性があると思っています。それが起こると一番怖い。何が怖いかというと、私は常に最悪のケースの想定から考えていくわけなんですけど、米中の関係がこれからどうなっていくのか、これはやっぱり覇権の交代ということになっていきそうだとされています。覇権の交代というのは平和的にはいかない場合が多いわけで、直近の覇権の交代というのを見てもイギリスからアメリカに移る時に二つの大きな戦争が闘われたわけです。じゃあ、これからの米中はどうなっていくのか、何ともこれは予断を許さないわけで、ある種、時代のけじめをつけるために、その衰退した部分というのは後世から見ると、「ああ、あれは衰退していったから、それはしょうがないよね」と見えるんですけども、しかし、リアルタイムにおいては衰退する側はおとなしく衰退はしないわけですね。だから、結局けじめをつけるために大きな戦争が行われてしまうケースが多い。

そういう意味で米中が大きな戦争をするという可能性は、私は排除できないと思うんです。だけど、その時にアメリカ人も中国人も死にたくないんですね。かつ日本は地理的に、アメリカと中国の間という最悪の位置にあるわけです。じゃあ、アメリカ人も中国人も死にたくない、自分は死にたくない、だけれども時代にけじめをつけるためには誰かに死んでもらわなければいけない。その時に、一番死んでもいいのは誰だってことになるわけです。一番価値の低い、尊厳を感じられないような命、一番安い命、それだったら犠牲にしちゃっていいんじゃないかということになってくる。その時に見出されるのは誰だろう。私は日本人だと思います。そこまで私達は非常にまずい状態にあると思います。だからある種の精神の独立性・自立性みたいなものを取り戻せるかどうか。取り戻せないのであれば、やはりそれなりの報いを受けるであろうと、そしてその報いを受けるというところから再出発するしかないという、そういう展開になることも私は可能性としてあると思います。

司会 ありがとうございました。すいません、まだまだあるかもしれませんが、もう時間になってしまいました。約2時間熱弁を振るっていただきました白井聡先生に盛大な拍手でお礼に代えたいと思います。ありがとうございました。

(終)

明治維新150年

「国体の歴史」と
しての日本近代史